

點で巢雪齋圖に見出すことは詳啓とこの僊可の畫系の關係を肯定するに十分であらう。

註 印文「巢雪」は古畫備考に傳能阿草山水横幅所捺とするものが方形白文で唯一である以外條印白文である。而も篆文にて區別しうべきもの二種、重廓のもの一種を模寫印に見出すが、今標準的な例をもたず決定し得ない。

又印「巢雪」印「領翁」の共在が領翁を僊可の稱として推擴められてゐるが、古畫備考所掲 猶ほ後考を要するであらう。

一般にその畫風に關しては、眞山水に於いて啓書記、草山水、畫花鳥に能阿彌と傳稱せらるる大體の輪廓を知る。かく整理しうる僊可畫の知識と、現存知らるるままでの作品、猿双幅(國華二一)鶯(國華二七)乃至傳模を存するもの(墨梅朝畫纂下)蘆葉達磨山水(大正十四年六月某家入札)に伍しては、此の雪嶺齋圖は史的背景を最も明確に描出し僊可畫の位置を指示する。歲寒三友圖贊古畫備考に「結城山主傳室的史」と見るもの之の史的關係に連繫して僊可の活動範圍を設定しうるであらう。

この圖に就いては古畫備考は嘉永二年二月、伊豫守への返事を註し、家傳には上杉家中より出づとする。(熊谷)

## 六、玉堂筆 江邨煙雨圖

大阪 松本松藏氏舊藏

帖裝 紙本墨畫 竪一四・五浬 横一三・四浬

今圖版として掲出した江邨煙雨圖は名家聚錦畫冊中の作品で此冊は書十五幀、畫十四幀より成り書には山陽、星巖、介石、米庵其他があり、畫には玉堂の他米山人、海僊、米江、介石、木米、竹洞、梅逸、文晁其他の文化年間を中心とする京攝派の南宗文人畫家集められてゐる。畫冊に仕立られたのは題簽に丁未春仲とあるに依つて弘化四年と考へられる。書は畫に對して各々讀の役目を成してゐる處から此冊が長年月の間一つの計畫のもとに集められた事が想像される。

玉堂の此圖は畫冊の左一幀にあり、右一幀に此圖に對する市河米庵の「山雪溪減水樹模糊元是雨裏如有如無」と云ふ贊がある。

此圖は青墨を以て江邨煙雨の景を描いたもので、彼の中年期に見る表現に際

しての印象整理上の不統制もなく、又才氣の露出も見えず、作風から推して晩年に屬す可きものと思はれる。然し晩年好んで用ひた俗にわら灰がきの山水と稱する素描に類した描法とも異り、潤墨による用意周到の作である點からして、決して此圖が飲興を借つて成つたものでない事は想像される。従つて技巧上に於てもそれ丈に寫實味が豊富で、之が又題材上からも深山や仙境の描寫でなく村落を中心とする風景だけに一般文人畫と異り、親みある風光を展開し、寫實的に一步を進めたものと認められる事。描法上に於ては水平線の平行線を以て廣潤な平遠の景を表現し、それは單に構圖上の問題を解決するに止まらず、更に進んで觀者の感情に畫の内容を規定する素因を與へてゐる。即此圖は水平線の併列に依つて觀者に安靜な感情を齎し、此感情は此圖に對し長雨に疲れた後漸くにして日射しを見た時の晴がましい氣持を想起せしめる。

雨は山頂より霽れ、次いで前方の樹姿をあらはにし、稍窪める江邨の上ののみ煙雨は凝集し、村落の厨竈より立ち昇る青煙と相交つて低迷してゐる様は長雨に疲れた村落の吐息とも見られよう。耳を澄せば煙雨を通して遙に鶏犬の聲を耳に感ずるが如き幻想を起さしめる程に煙雨のたゞよふ處家屋、樹木の明滅する様に音を感ずる筆觸を見る。

此圖は又其墨の濃淡の配合に依つて深遠の趣も見られ、中央山頂右手に施された無雜作な焦墨の皴は立體感を現すに充分である。此圖一面に漲つてゐるのは玉堂の持つ繊細な神經の動である。

圖の右上落款の下に捺された白文方形の印には琴士の二字が讀まれる。玉堂は延享二年生、姓を紀、諱を弼、字を君輔と云ひ、後年玉堂琴士と號した。父兵衛門宗純が備前岡山城主池田侯支封嶋方藩の家臣であつた關係から父の歿後七歳にして出仕し、寛政五年四十九歳の時致仕し、二子春琴、秋琴を携へて四方を遊歴し、文政三年九月三日京都に於て年七十六歳で病歿した。(尾崎)

## 七、華 籠

滋賀縣 神照寺藏

銅製 鍍金銀 直經約二九・六浬 高約四・九浬

圓形の銅板を窪ませて之に寶相華文様を切り透し、内面はそのまゝに鍍金をかけ、外面即ち圖示する所の面は刀を用ひて肉を削り筋彫を以て花葉を刻出し、全體を鍍銀し、花苔等の主要部分を鍍金してゐる。縁には同じく鍍金の覆輪をかけ、三箇の環から組緒を下げ、下に截頭八角錐體の錘を付ける。文様の一部には折損の爲後世金銅の薄片を切り抜いて釘付けにした所があり、緒は斷爛して芯を露出してゐるが相當の時代を有し或は原初のものかとも推せられる。本寺には尙この外に此種のもの數枚、及やゝ時代の降るもの數枚をも傳へてゐる由である。

その文様はよどみなき蔓の走り方と張りのある屈曲とによつて甚だ錯雜し、一見奔放流麗な自由文様の如くに見えるが、再檢すれば嚴整なる三方相稱文より成る事が知られる。變化の求め難い此種の文様をかくまで巧に纏めて而も形式化せず、一種の古味を湛えて遒勁の感を遺してゐる所に、相當時代の遡るべきを思はせるものがある。縦者平家納經の金具に見られる重厚にしてしかも變

華 籠

滋賀縣 神照寺藏

化多き美しきは求められないとしても、四天王寺藏光背に比しては寧ろ渺たるこの一華皿の方が文様の驅使に於て、又素材の持つ堅硬感を巧に生じて用ひてゐる所に工藝品としての優秀さを感じ得るのであつて、かく考へて之をやはり藤原期の一遺品と見る事は略謬なきものと云へやう。殊に無雜作な切り透しを薄肉彫の如く勁い刀法を以て、精細に而も力強く仕上げて行く所に當代のものとしても稀に見る美しさを覺えるものである。

華籠は散華に用ふる葩を盛る所のものである。大般若經に佛說深般若諸天散華積至如來膝と云ひ、阿彌陀經に各以衣袂盛衆妙華供養他方十萬億佛とあり、衣袂の名稱は別の器皿が用ひられるやうになつてもその儘踏襲されて居るが、その佛畫に現れる衣袂は華篋ともいひ、大體今謂ふ所の華籠と形制を同うして、下緒の飾りを缺くものゝやうである。華籠は竹製もあるが多くは金銅を以て製する。而して佛具としては三具足、五具足などに數へらるべき重要なものではないが、それ自身として法器たるよりも裝飾具たる性質を多分に備へ、又堂塔供養或は法華八講などの場合に大檀那たる貴顯縉紳より寄進せらるゝものが多かつた爲に甚だ善美を盡したものが作られたらしい。時代はやゝ降るが延徳御八講記には銀の花苞と銀の葩の新院姫宮から捧げられた事が見え、よろづの御法にも、「金銀の花びらどもふるきにかはらずたてまつらせ給へる。この外攝家清花宮々などよりもいろ／＼の繪の葩どもたてまつられしかば」などゝ見えてゐる。物語に或は作り繪に具象された趣味に徹底する時代の特色がかくの如き小器皿の末にまで行き届いてゐる事をまのあたりに見る時、この渺たる一花籠もその時代の持つ美しさをさながらに凝縮して今日に傳へ得たものとして興味深く眺められるのであつて恰かもかの榮華物語に道長が「花籠に花のあればれの尼君のかとおほせられてちらさせ給ひし」もかくの如き美しき華籠であつたのかと想像されるのである。(正木)

## 八、舍利石塔

全高 一、〇一五米

朝鮮慶州 佛國寺藏

(關野貞「佛國寺舍利石塔」參照)